

幽玄

題字 高秀秀信

横浜能楽連盟

会報 No.51

平成28年3月31日

「伝える」

会長 馬場 洋一



自分自身が年齢を重ねたせいもあり、最近「伝承」についてよく考える。様々な場面で、つい「いかに伝えるか」「いかに残せるか」という視点で見ていることに気づく。

横浜で生まれ育った井上淑彦というジャズサックスプレーヤーが昨年3月に64歳で急逝した。聴衆の心に深く語りかける演奏で、「日本屈指のジャズサックス奏者」と言われた男だった。亡くなる一年ほど前、縁あって彼のライブを聴いた。自作の曲しか演奏しない彼が、その日のアンコールでは荒井由実作曲の「卒業写真」をソロで吹き、ステージから訥々と語った。

「高校時代に学園紛争があり、僕たちには卒業式がなかった」。彼の感性和卓越した演奏技術に、甘く切ない思い出が加味された素晴らしいステージだった。後日、彼のCDを聴きながら考えた。CDによって演奏は後世に伝えられるけれど、「井上淑彦」を蘇らせることは叶わない。それでも、彼に影響を受けた奏者が新たな音楽観をもってこれから世に出てくるだろう。そこに「伝承」の意味があるのではないだろうか。

同じ頃、能に関する論文で、大阪大学大学院で博士号をとったペトコ・スラブフさん（ブルガリア出身）が、能の邦楽器を疑似体験できる無料アプリ「Olayashi Sensei（お囃子先生）」を開発したと朝日新聞（2016年1月14日）で読んだ。「も」と気軽に能に接することが出来るれば」との声に思い立ったそうだ。私もスマホにダウンロードしてみたが、画面の小鼓を指

先で叩くと小気味よい音が鳴るなど、確かに興味を惹く。曰く「能には日本人の心や美意識のコアの部分が詰まっている。こんなに豊かな文化を知らないのはもったいないですよ」。彼の、日本の伝統芸能の素晴らしさを「日本人に伝えたい」という思いには頭が下がる。

技術の発達によって音声や映像による記録が可能になり、近年はデジタル化され一層鮮明に記録されるようになった。口伝の時代よりも「伝承」の手段は格段に多い。また、インターネット等IT技術の進歩により、「発信」が容易になってきた。

しかし、いかに科学技術が進歩しても、それが機能するには必ず「人間」が介在していなければならない。数百年にわたり「伝承」されてきた能も、確かにある。今、我々が能楽を楽しむのも、人間の英知と先人に對する尊敬の念により続けられてきた先人たちの「伝える」という営みの賜物であろう。

能楽は発祥以来、数多の能楽師によって数百年の間継承され、これからも連綿と続くだろう。その努力は大変なものだと想像に難くない。時の支援者の存在も大きかったはずである。長い歴史に思いを馳せ、能楽を大切にし、様々な方法で次世代に伝えていく支援者に我々もならねばと改めて思う。

第31回

五流能楽大会報告

宝生流 小林 美佐子

平成27年10月3日（土）、横浜能楽堂において開催された標記大会の概要は次の通りです。

- 一、出演社中数：33
（当日1社中欠席）
- 二、出席者数：延べ263名
- 三、番数：素謡15・連吟5・仕舞19・独吟1・独鼓1
- 四、五流競演：「狸々」

仕舞4番（観世・宝生・梅若・金春各流派）・連吟1番（喜多流）・連吟太鼓入り1番（金剛流）と多彩な内容でした。

かつてこの「五流能楽大会」の運営では、演目時間の精査・駐車場の利用のしかた・湯茶接待の合理化等々について、連盟内で周知徹底できなかったこともあり、担当流の作業が順調にいかず、理事会の報告で様々な問題点が提起されました。そのため理事会で討議を重ね、この数年は各流派のご努力もあってほとんど問題なく運営されるようになってきました。今年度も、おかげ様で概ね順調に進行できたと思います。

このようにスムーズに運営できるようになったのは、事務局特に総務・会計担当の倉藤・安田両理事のご尽力によるところが大きいと感謝いたしております。

す。殊に能楽堂や印刷所との調整や他流派との連絡折衝等々、担当流派だけでは大変な時間と手数がかかります。

連盟の掲げる「能楽を嗜む人を一人でも増やしていきたい」という目的のために、各流派が一つの舞台で日頃の研鑽の結果を披露する「五流能楽大会」はすばらしい事業であり、今後とも充実したプログラムを提供していきたいものです。

能楽という羅針盤

観世流 齋藤 好貴

いささか突飛なテーマですが、能楽との巡り合いを考えた時、自然に思い浮かんだのがこの文言でした。今日まで仕事や家庭以外でこれほど長期（とは言え20年たらずですが）に継続していることは他に見当たらず、古典や音楽を専門に学んだ経験もなく運動かつ音程不案内（所謂音痴）を自認する私が挫折することなく、謡・仕舞の稽古を通して能楽というものに親しみと感動を持ち続けられることに素直に嬉しさを感じています。

幼児の頃に祖父がお仲間と謡曲の稽古をしているのを耳にしたのが、能楽との初めての出会いでした。その後数十年間は全くと言っていい程接点はなく、偶然横浜能楽堂主催の講座を廣

報で目にしてなんとなく応募し参加したことが、次の大きな接点となりました。一般常識レベルの知識のみで飛び込んでしまい、音程不案内も禍いしてまさしく七転八倒の態で謡の稽古を始めました。数年後には仕舞の稽古にも飛び込み、両手足の制御もままならない自分に愕然としました。当然上達の歩みは遅く、確実に習得されている方々を羨ましく思います。不思議と一度もやめたいという思いは浮かんできません。きつと定例会等の緊張感や達成解放感、そして社中の方々を通じて多くの事を学べるのが、自分にとって何とも心地よい充実感を与えてくれるからだと思っています。

自分にとって全く私的な楽しみである能楽ですが、偶然仕事上のご縁から他流の方とも交流する機会を得て、公演を拝見したりお話を聞く中で、改めて能楽が持つ多様性や奥深さを実感しました。そして、地域活動を通じて多くの人が能楽に対して潜在的な親しみや期待を持つていることもわかるようになりました。更には、単に謡や仕舞の上達で自身の充実感を満たすのみでなく、能楽を通して様々な交流により日本だけでなく外国固有の舞楽にも関心を抱くようになりました。

今私には、過去現在未来という時間枠の中に、常に感動や喜

びを求めたいという思いがあります。能楽との出会いは、私にとってかけがえのない羅針盤となっており、いつも幸福感への正しい方位を指し示していることを確信しています。

謡曲と街道歩き

喜多流 飯田 和枝

我が家は旧東海道の武蔵の国と相模の国の境で、境木地蔵のお宮があります。それでは思い立ち、東海道を踏破することになりました。友人と二人、日本橋から出立し、月1回のペースで2年半かけて三条大橋に着きました。それ以後、歩くことにはまって、五街道と北國街道を歩いてしまいました。

その道程で何が一番印象に残ったかというところ、謡に出てくる場所の多さです。浅学の私でも驚くばかりで、習った曲のゆかりの場所に出会った嬉しさに、得々と友人にその曲の解説をしてしまいました。

五街道はご承知のとおり、東海道、中山道、日光街道、甲州街道、奥州街道ですが、奥州街道大田原の先の芦野という地の田圃の真中に「遊行柳」の柳を見た時は、なんの変哲もないこんな所をどうして知っていたのだろうと驚くばかりでした。やはり謡に多く出てくるのは東海道と中山道だと思います。



六弥太一族の墓

はあまり使われない地名も旧道ではしつかり残っています。謡をお楽しみの方々が、折があれば旧街道を歩いてみては如何でしょうか。きつと、何も残っていないと思われる所でも新しい発見があると思います。

『昭君』に想いを寄せて

観世流梅若会 菊田 博

平成20年春、熊本城の本丸御殿が復元された。この御殿の中で一番格式の高い藩主の対面所として「昭君の間」がある。これは加藤清正が旧主秀吉の子息秀頼を迎え入れるための「將軍の間」の読み替えと言われているが、その壁や襖には中国の前漢の時代に匈奴に嫁がされた悲劇の美女、王昭君の物語が描かれている。その一面に馬上の王昭君の図があるが、これは胡国へ向かう姿を描いたものと思われ、中国の詩人李白の「王昭君」という詩を思い出させる。

上馬啼紅頰
今日漢宮人
明朝胡地妾

能の世界では、この物語は「昭君」の題で五番目物として作られているが、昭君の老父母と胡地の王呼韓邪单于（こかんやせんう）を主題として王昭君は伏線的に扱われている。そこで王昭君の姿を垣間見て

みたい。名は王牆（おうしよう）、字は昭君（BC32頃在世）、斉国の王王穰（おうじょう）の娘。17才の時に父によって漢の元帝に献ぜられた。元帝には大勢の宮女がいたので、画工達に肖像画を描かせ、その画を基に召して寵愛することにした。そのため宮女達は画工に賄賂を贈って美しく描いてもらおうとしたが、王昭君だけは賄賂を贈るのを承知しなかったので醜く描かれ、ついに帝に御目見えの機会がなかった。たまたま匈奴の单于が入朝し妻を要求したので、元帝は肖像画を調べて醜く描かれている王昭君を遣わすことにした。やがて出発の時に初めて会ってみると、後宮第一の美貌であり立居振舞も立派であった。帝はいたく後悔したが、既に決めたことであり外国に対する信義を重んじて諦めた。そこでその間の事情を詳細に調べ、賄賂を貰った画工はみな棄市（死体を市中に棄てさらす）の刑に処した。

また、呼韓邪单于が死んでその子の世達（せいたつ）が单于に立った時、王昭君は世達に向って「私を漢の扱いにするか匈奴の習わしにするか」と聞くと「匈奴の礼に従う」と答えたので、悲観し毒を飲んで死んだ。匈奴の礼とは親子二代にわたって妻となることである。

長寿の秘訣

宝生流 岩崎 みき子

宝生流の最長老でいらした高橋米子さんが、昨年11月に亡くなられました。享年102歳。最後まで頭脳はしっかりしておられ、また骨折の手術の回復力も抜群で、担当医が学会で発表した程だそうです。縁戚である私が米子さんの主宰する相雲会に入会した時、既に80歳を超えておられましたが、実にお元気で足もお丈夫で、その速さには誰も追いつけませんでした。

私は常々皆様から、どうして米子さんはあんなにご健康なのかと質問され、当時はわからずにいましたが、その回答の一端として、先年町内会の会報に米子さんが書かれた文の一部をここにご紹介したいと思います。

『大正2年7月19日東京で生まれ育った私は今年で101歳になります。昭和21年、慣れない疎開地で姑と3人の子供を残し、夫は39歳で亡くなってしまいました。それからただがむしやりに働いて生活を送って参りました。人一倍体を酷使した私が、なぜ100歳を超えて元気であられるのか不思議に思いますが、元来の楽天的な性格に加え、趣味を持っていたからというところかもしれません。18歳の時に出会った謡曲が、私を支

えてくれました。よき師やお友達、お弟子さん達との交流と、全国の謡曲会への参加等、子供が育った後は一人身を幸いとはかり、外国までも遠征しました。このことが長寿の原因ではないかと思っております』

また「楽で楽しい高齢者ライフのスラスラと長寿に聞く長寿の秘訣」という高齢福祉介護課のインタビューでは、次のように答えておられます。

『秘訣は、子供の頃から続けている趣味の謡曲です。腹式呼吸で発声するので、心肺機能が丈夫でいられます。それと、マイペースでよくよい楽しい楽観的な性格ですかね』

宝生流囃会や連合会の理事なども務められ、流友の皆様にも慕われていた米子さん、今はお空の上から、皆様のご健康と横浜能楽連盟の発展を見守って下さることを思います。

能面を打つて

金春流 小林 庄一

能への興味の発端は、2007年に能面の展示会をたまたま見つけ、瀧川先生の横浜教室に通うようになったことでした。瀧川先生は能舞台の松の絵を描かれる大家です。

教室でいろいろな題材を描くうち、能を見なくてはと思ひ、あちこちの能楽堂で能を鑑賞す

るうちに、今度は能面を打つてみたくなり、能面教室にも参加するようになりました。

始めは「小面」でした。彫る、色を付けるなど手数がいっぱい、中でも仕上がり方を左右する毛描きが難しいのですが、ここで能面の経験が役立ちました。丁寧な指導していただき、時間はかかりましたが何とか完成させることができました。「小面」の次は「童子」に取り組み、その後「翁」。翁は凹凸が多く複雑な構造で、髭は馬のたてがみの毛を植え込み、眉はウサギの毛です。口の部分は切り離して麻の紐で結びます。丁寧な指導でいい顔立ちになり、気に入っています。その後は「般若」に挑戦しました。般若の角は真ん中の裏から切り出して成形し頭に差し込むことがわかりました。金箔を貼った銅板を目に入れ、角や歯は金泥です。次は狂言面の「乙(おと)」を昨年末に完成させ、今年は「若女」に取り組んでいます。

また、あざみ野フォーラムでの「能面の岩崎さんのお話を聞き能面を見る」(二宮倫行氏主催)にも参加し、展示会で岩崎さんの能面も拝見しました。

謡との出会いは、あざみ野の地区センターで二宮さんの「高砂やを謡ってみよう」というイベントに参加した時からです。その後仕舞として「人間五十年」

を4回で体験するというイベントにも参加し、謡の教室もあることを知って「人間五十年」をもう少し完成させたいとお願ひしました。しかし、動くことの苦手な自分には無理なことがよくわかります。謡を選択して現在に至っています。謡は長くやれそうなので、健康に気をつけて続けたいと思っています。



能楽に触れて

金剛流 宮崎 信弥

私が謡曲に初めて触れたのは6年前、会社(株IHI)の先輩に誘われて見学した横浜能楽堂でのつどいでした。言葉は聞き取れないし物語もわからず、でも檜の香りが心地よく、和服を着て舞台上がっている様子が非日常的で面白い、と興味を持ったことを覚えていま

す。それから、週に1回定時後の謡曲部のお稽古に通うようになり、「橋弁慶」のシテとして横浜能楽堂の舞台にも上がらせていただきました。

能楽・謡曲を知る前は、「伝統芸能」全般に対し、「たまたま残った古めかしいものをありがたがって残そうとしている」と思い違いをしていました。能楽やその周辺の歴史を知り、いろいろな物語に触れていくと、星の数ほど生まれた芸能の中で、時代の流れに関わらず人の心をつかみ続けてきたものだけが現在まで存続していることを理解しました。今では、「残ったから価値がある」のではなく「価値があるからこそ残った」という深い尊敬の気持ちを持つようになりました。極限まで無駄をそぎ落とした詞章や所作で最大限のメッセージを伝える能楽の表現は、慣れるのに時間はかかりましたが、奥が深く面白いです。

現代の生活でそんな例として気付いたのが「薄皮饅頭」です。「餡がたつぷり入っている」というメッセージを「薄皮」の2文字で送る売り手と、読み解ける買い手に感心しました。現代の日本人にも、簡素で奥深い表現の素養が備わっているのだと感じます。

私の職場では毎年夏にフランスやアメリカから学生のインタインを受け入れています。日本文化に興味を持って来日した彼らに、能楽にもぜひ触れてほしいと考え、IHI横浜謡曲部では5年前からささやかな体験イ

ベントを行っています。能楽の歴史や特徴の説明、部員による謡と仕舞の実演、学生の小謡体験、そして和服の着付けという内容で、日本の伝統文化を体験する貴重な機会となり、毎年とても好評です。

当部は、昨年50周年を迎えました。お稽古で謡の上達に努めることはもちろん、多くの方に謡曲や日本文化の魅力を伝え、部活動が活発に末永く続いていくよう、微力ながら取り組んでいきたいと思っています。

「ワキ」のこと

下懸宝生流 椎名 忠

『ワキ』というのは文字どおり脇役と考えていただいてかまわないわけですが、ところが近代演劇における脇役ほどには主役に深く関わってはいきません。シテは神であり雅な女性の霊であり、草木の精でありというふうで、そのほとんどが超人的な存在であります。対するワキはあくまで現身の人間ですから、主役と同質の存在である近代演劇の脇役とは本質的に異なっています。能における主役、シテの存在は絶対的に大きいということです。詩人の高橋睦郎さんが「ワキは能という魂呼びを行う祭祀団の長だ」というような意味の事を言われたのですが、なるほどなあとと思います。つまり

ワキはシテの体現する奇蹟を観客に伝える媒介者ということなのです。

さて本日の能「竹生島」は春の曲です。ワキは春の浮き立つような空気を能楽堂の中に満たさなければなりません。シテの意図する美のフォルムを十分に表現してもらうための背景を整えることがワキの役目と一生懸命に努めます。

以上は、昭和48年の秋に京都大江能楽堂で催された学生能のチラシに書いた拙文です。身の丈をわきまえぬ、思いばかりが先走る若さが微笑ましくもあります。

当時所属していた早大下懸宝生会では、宝生弥一先生から、大きな声で言葉をハッキリと、というワキ謡の基本を、繰り返して厳格に指導していただきました。学生能出演時にはご子息の宝生閑先生に教えを受ける吉例で、初めて聴く、張扇が打ち込む拍子にのせた謡に、華やかな能舞台が目前に広がる思いがしました。宝生新・弥一という歴代名人の膝に小児の時から抱かれて習った相伝の間拍子。宝生閑師39歳の華麗な謡を独り占めにした一夏の稽古は生涯の事件でありました。

爾来40余年を経た現在も、素人弟子の会の一員として閑先生の教えを受けています。変わらぬ峻厳な姿勢に学び、「常にそ

の一瞬を新たに生き切る名手の芸(能楽タイムスより)」を味わう至福の時間は今も続いています。

の今年2月1日、宝生閑先生は食道がんのため81歳にて逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。編集部

横浜能楽連盟連絡先
◎事務局 倉藤
TEL〇四五―八三五―二三六一
◎横浜能楽堂
TEL〇四五―二六三―三〇五〇

能楽堂だより

横浜能楽堂は6月に開館20周年を迎えます。「開館20周年記念企画公演」を始めとする公演予定は、次の通りです。

第64回横浜能

6月4日(土) 午後2時開演
狂言「空腕」(和泉流) 石田幸雄
能「八島 奈須与市語」(宝生流) 大坪喜美雄
S席四千元/A席三千五百円/B席三千元

チケット発売中

横浜能楽堂開館20周年記念企画公演

「伝説の能面・狂言面」

第1回 6月11日(土) 午後2時開演

「翁」(観世流) 梅若玄祥、山本東次郎

「新作」(横浜風流) (大蔵流) 山本則重

第2回 7月17日(日) 午後2時開演

「復曲」狂言「浦島」(和泉流) 野村又三郎

能「杜若」(金剛流) 金剛龍謹

第3回 8月21日(日) 午後2時開演

狂言「蟬」(和泉流) 野村万蔵

能「熊野」(宝生流) 宝生和英

第4回 9月24日(土) 午後2時開演

狂言「八尾」(大蔵流) 山本泰太郎

能「藤戸」(観世流) 観世鍬之丞

◆セット券：S席二万八千円/A席二万四千円/B席二万円 ◆単独券：(第1回) S席九千円/A席八千円/B席七千円 (第2、3、4回・各回)

S席七千円/A席六千円/B席五千円

チケット発売中

28年4月～9月の公演案内

普及公演「夏休み親子能楽ワンダーランド」

7月23日(土) 午後2時開演

狂言「柿山伏」(大蔵流) 山本則重

能「紅葉狩」(観世流) 武田宗典

おとな：S席四千元/A席三千五百円/B席三千元 こども：千五百円

※保護者はこどもと同数まで千円引き(ご希望の方は電話か窓口にてお申込み下さい) こどもチケットをお求めにならない場合は適用されません。こどもは18歳以下が対象です。

「体験しよう！」午前10時半から：チケット(こども)ご購入の方対象・定員80名・先着順

※親子でご来場下さい。(申込みは電話か窓口で)

能・狂言の動きや能の楽器が体験できます。

チケット発売日 5月14日(土) 正午から

(初日は電話・Webのみ)

講座「スリーステップで学ぶ能」

9月17日(土) 午前10時30分開演

ステップ1「源氏物語『浮舟巻』を学ぶ」

ステップ2「能『浮舟』の詞章を読む」

ステップ3「能『浮舟』を知る―演者の視点から」

馬場あき子(歌人)

三田村雅子(上智大学特任教授)

能「浮舟」(観世流) 梅若玄祥

S席五千元/A席四千五百円/B席四千元

チケット発売日 6月13日(土) 正午から

(初日は電話・Webのみ)